

I

金沢城下と近郊農村

1 金沢城下の武家屋敷と町屋へ糞尿肥貫いに



- | | |
|-------------------------|----------------|
| 1 松木 | 13 藁 |
| 2 妻入り平屋の百姓家 | ⑭ 町人 |
| 3 入母屋型草葺き屋根 | 15 丁髷 |
| 4 屋根押さえ | 16 羽織 |
| 5 窓 | 17 脇差 |
| 6 頬被り | 18 袴 |
| 7 テッコバ
(テッコウモジリ、仕事着) | 19 高下駄 |
| 8 腰蓑 | 20 木杖 |
| 9 胴蓑 | 21 グル髷 |
| 10 大枘 (天秤棒) | ⑳ 赤い小袖の着物を着た女性 |
| 11 肥担桶 | 23 帯 |
| 12 葉付き大根 | 24 青前垂れ (蔽膝) |
| | 25 チロリ (銚釐) |

頬被りや白笠を被り、腰蓑を纏った百姓たちが空の肥担桶を大枓（天秤棒）で担い、これから城下町に向かうところである。ちょうど城下町金沢の入り口、松ノ門に差し掛かっている。道の両側にはまだ、屋根押さえで留めた入母屋型草葺き屋根の民家が軒を連ねて建っており、その道を行くテッコバを着、腰蓑姿の百姓の肥担桶には畑から採れたばかりの葉付きの生け大根や柎付きの稲が入っている。百姓はこれらと交換に、以前から契約している城下町の馴染みの武家屋敷や町屋（商人・職人・日雇い）に糞尿を貰いに行くのである。

だが、『農業図絵』の成立年の享保2年（1717）以前には、すでにその糞尿の確保も困難になりつつあった。というのも、同じ土屋又三郎が著した『耕稼春秋』（『日本農書全集』第4巻 農山漁村文化協会 1980年）によると、すでに宝永4年（1707）の金沢城下の下肥は家内人数が7、8人から10人くらいの場合、米5斗、4、5人の場合、米2斗5升ほどの交換割合によって、城下から4、5里四方の近郊農村の百姓家に握られていたという。つまり、城下町や在町の住民から排出される下肥は近郊農村百姓の権利に完全に帰っていたのである。幕末、下肥仲間（糞尿汲み取り業者）の結成が進むと、下肥はその仲間の権利に収斂されていくようになる。ちなみに、土屋又三郎は厩肥や草肥に「^{こゑ}育」の字をあてている。

まだ下肥仲間の結成の動きはみられないものの、18世紀はじめの金沢城下では町方が約7万、武家方が3万余で約10万余の人口があった。金沢藩の海岸地方では干鰯の生産があり、裏作の菜種作に使われ、馬耕が行われていた地域では厩肥も使われていたが、城下の近郊農村では城下町の人びとを対象とする商業的農業が発展し、集約的な多肥農業が進んでいた。それに使う下肥は近郊農村が握った。ただ、城下近郊の村々では肥効の高い小便を多く使うことから正月4日から毎日その汲み取りに出かけたという。というのも、「小便こゑ金沢四方口一里の在々ハ、第一此こゑを多くする也。毎朝毎日こゑかゆる

物を拵へ、侍屋敷并町々家々にても是を求」（前掲『耕稼春秋』10、p203。解題）めるためであった。ただ、その下肥の対価は米ではなく、一般的に葉付きの生け大根と稲藁であった。

もちろん、下肥料の対価には米もあった。それは金沢から3～5里離れた百姓が「付坪」として行っていたものである。「付坪」とは金沢の侍屋敷や町家、寺社などの糞尿を契約した百姓が米と交換に汲み取ることである。侍屋敷や町家などの家内の人数が7～10人までの家ならば、秋、米で5斗、4～5人の家の場合は米2斗5升を持って行って下肥を全部汲み取った。石川郡の百姓持高50石の場合は、肥料代が米2石ほどであったといわれる（前掲『耕稼春秋』10、p203。解題）。18世紀になると、代価は金銭になる。

ところで、百姓の前方を羽織袴に帯刀をし、高下駄に木杖を握り締めて歩くのは城下町に挨拶回りに向かう町人であろうか。また、その町人や百姓とすれ違う女性がいる。島田髷を結び、赤色の小袖に青色の前垂れ（^{へいしつ}蔽膝）をつけて、手にはチロリを持っている。清水氏はチロリを提灯としているが、そうであれば早朝の薄暗い時刻ということになる。百姓の肥担桶にはまだ糞尿が入っておらず、周囲の人びとには迷惑は掛からないから早朝のように思えるが、薄暗い早朝から人びとが挨拶回りに出かけるとも思えない。女性の持っているものはチロリと考えてもよいであろう。それは酒を温める金属製の容器であるが、酒を買ってきたか、どこかに届けるのであろうか。いずれにしろ、正月の雰囲気醸し出されている情景である。

2 金沢城下に門付けに行く春駒と肥担桶を駄馬で運ぶ百姓



金沢城下の出入り口にある松ノ門から入って直ぐのところ、いまの野町界隈の町道か。店が軒を連ねている。その店もいろいろで、右端の店は妻壁と妻屋根をもつ入母屋造りの家屋であるが、他の店は軒連ねのせい、切り妻造りの木羽葺き屋根の店である。しかも、屋根押さえの役割を兼ねているのか、所々に置石が置かれている。壁面も板張りのようにみえるが、図絵のなかには萱壁もあったか、に思われる。店は道路に向かってみな、縁板（台）があり、

そこが開け放されて商品が並べられている。その形態からみると、江戸の出し店、大坂の床店と同じようなものと思われる。図絵に向って右2軒目は紙箱屋、4軒目は桶屋であろう。

店の前の街道を、胴蓑姿に白手拭で頬被りした百姓が駄馬を引いて、城下の町屋などから下肥を買いに行くために歩いている。駄馬の両側には肥担桶が付けられ、背には蕙があてがわれている。馬の歩きが軽やかにみえるのは肥担桶がまだ空であるからで

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 剥板葺きの
入母屋造りの板屋根 | 19 鬘 <small>たてがみ</small> |
| 2 妻屋根 | 20 蕙 |
| 3 妻壁 | 21 肥担桶 |
| 4 格子柵 | 22 面懸 |
| 5 切妻造りの板屋根 | 23 鼻革 |
| 6 置き石 | 24 轡 <small>くつわ</small> |
| 7 水引 | 25 引き綱 |
| 8 間口1間幅の蔀戸 | 26 蹄 |
| ⑨ 紙箱屋 | ⑳ 門付け芸人の春駒 |
| 10 縁板（縁台）か、
あるいは濡れ縁 | 28 駒 |
| 11 縁束 | 29 白菅笠 |
| 12 簾 | 30 網肩当て蓑 |
| ⑬ 桶屋 | 31 脚絆（はばき） |
| 14 頬被り手拭 | 32 草鞋 |
| ⑮ 百姓 | ⑳ 島田鬘の女性 |
| 16 胴蓑 | 34 小袖の青色着物 |
| 17 裸足 | 35 青帯 |
| ⑱ 駄馬 | ㉑ 银杏鬘の少女 |
| | 37 振袖 |

あろう。

馬のあとに続くのは、話しながら歩いている門付け芸人の春駒と町屋の歳離れた二人連れの女性である。春駒は白菅笠を被り、網肩当て蓑を着ている。春駒は門付けをするときに張形の駒（馬首）を竹の棒先に付け、手綱をそえ、それに跨って祝言を唱えながら訪問家に威勢良く駆け込むので、とくに武家では春早々縁起が良いと歓迎された。これから正月の城下に行って一儲けしようと話をしているであろう。足にはしっかりとした脚絆（はばき）を巻いていることから遠方から旅してきたようである。

その側を年嵩の女性と少女の二人連れが、やはりお喋りしながら城下町に向かって歩いている。年嵩の女性は島田鬘のような髪形を結び、青色の艶やかな着物を着ている。この着物は小袖でなく、振袖のよ

うにみえる。清水隆久氏はこの年嵩の女性を遊女と見ている（『農業図絵』解説p193）。とするならば、年嵩の女性と手をつなぎながら歩いている银杏鬘に振り袖姿の少女は禿であろうか。町に遊びに行くのであろうか。遊びに行くのであれば、18世紀には遊女もまだかなり自由の身であったことになる。ここはやはり町屋の女性の華やかな正月姿と考えたい。また、そうみるほうが自然のように感じられる。

ただ、この女性は眉があり、未婚の女性とも考えられる。であれば、姉妹か？ 図絵の中には中年の女性でも眉が描かれている場合があり、眉剃りは一般的な慣習でもなかったかに思われる。ともあれ生活感溢れる中にも、正月の華やかさが感じられる情景である。

3 正月の挨拶回りに忙しい武士たちと僧侶



街道沿いに置石を置いた^{へぎいた}剥板葺き切妻造り屋根の商店が続く。商店の裏には白壁の土蔵が建てられ、その周りに木々があることから小さな庭園も造られていたと思われる。右端の店には呉服が立て掛けられ、縁板（床縁）の近くには畳んで整理された呉服が積み重ねられている。この様子から、この店は呉服屋であろう。

呉服屋の1軒置いた隣は甕・桶などの容器を商う店である。この店も置石を置いた切妻造りの剥板葺き屋根であるが、中2階建ての立派な店造りである。中2階立てであるのは、町人が武士を家から見下す

のは無礼であるとの考え方からそのように建てられたという。

壁板には雲形の飾り窓が施されている。金沢の町屋は間口が概ね5間を普通とし、小さいといえども3間を下らないといわれるが、図絵の店をみると、4間ほどであったか。ただし、高さは1丈4尺を越えないきまりであった。

店の前には水色の水引き暖簾が架けられている。左隣の店も同様である。店の飾り窓には丸型のものもあり、葎戸らしき戸もみえる。また、蝶番のある戸もあり、有力店の一軒か、と思われる。この蝶番

- | | |
|---------------|--------------------------|
| 1 剥板葺き切妻造りの屋根 | 21 脇差 |
| 2 置き石 | 22 神明宮の鳥居 |
| 3 白壁の土蔵 | 23 注連縄 |
| 4 縁板（床縁、台） | 24 蜜柑 |
| 5 呉服 | 25 白壁の土塀 |
| ⑥ 呉服屋 | 26 高僧 |
| 7 雲形の飾り窓 | 27 立帽子（僧帽） |
| 8 水引き暖簾 | 28 袈裟
（三会＝法衣＝福田衣＝僧伽梨） |
| 9 甕 | 29 供の坊主 |
| 10 桶 | 30 頭陀袋 |
| ⑪ 容器屋 | 31 傘 |
| 12 部戸らしき戸 | 32 尻端折りの中間 |
| 13 格子戸 | 33 前髪立ち |
| 14 防風雪用の竹簾 | 34 百姓 |
| ⑮ 武士 | 35 白手拭被り |
| 16 脇差 | 36 総蓑 |
| 17 肩衣 | 37 大杓（天秤棒） |
| 18 袴 | 38 肥桶 |
| 19 高下駄 | 39 葉付き大根 |
| 20 傘持ちの中間 | |

のある戸の頑丈さから、あるいはこの店は両替商かも知れない。呉服屋と容器屋との間の家屋は両店の人間が出入する玄関を兼ねた建物であろう。入って直ぐに二股に分かれて廊下がある。入り口の格子戸の下半分にはまだ取りはずされていない防風雪用の竹簾が施されている。

店の前を行き交うのは脇差姿の武士と高僧の一行である。武士は2人とも色違いであるが、肩衣、袴姿の礼装である。年始周りをしているのであろう。水色の肩衣、袴姿の武士は傘持ちの中間を連れて歩いている。武士は下駄を履いているが、中間は裸足のようにみえる。草鞋を履いているのであろう。

この武士が通りかかろうとしている所の鳥居は野町広小路にある神明宮の鳥居である。鳥居には正月らしく、注連などの飾藁が飾られ、蜜柑も供えられている。神明社は現存しているが、その鳥居の2本の横棒石のうち、下段の横棒石は、図絵のように立ての支柱幅からは出していない。現在までの間に立て替えられたに違いない。

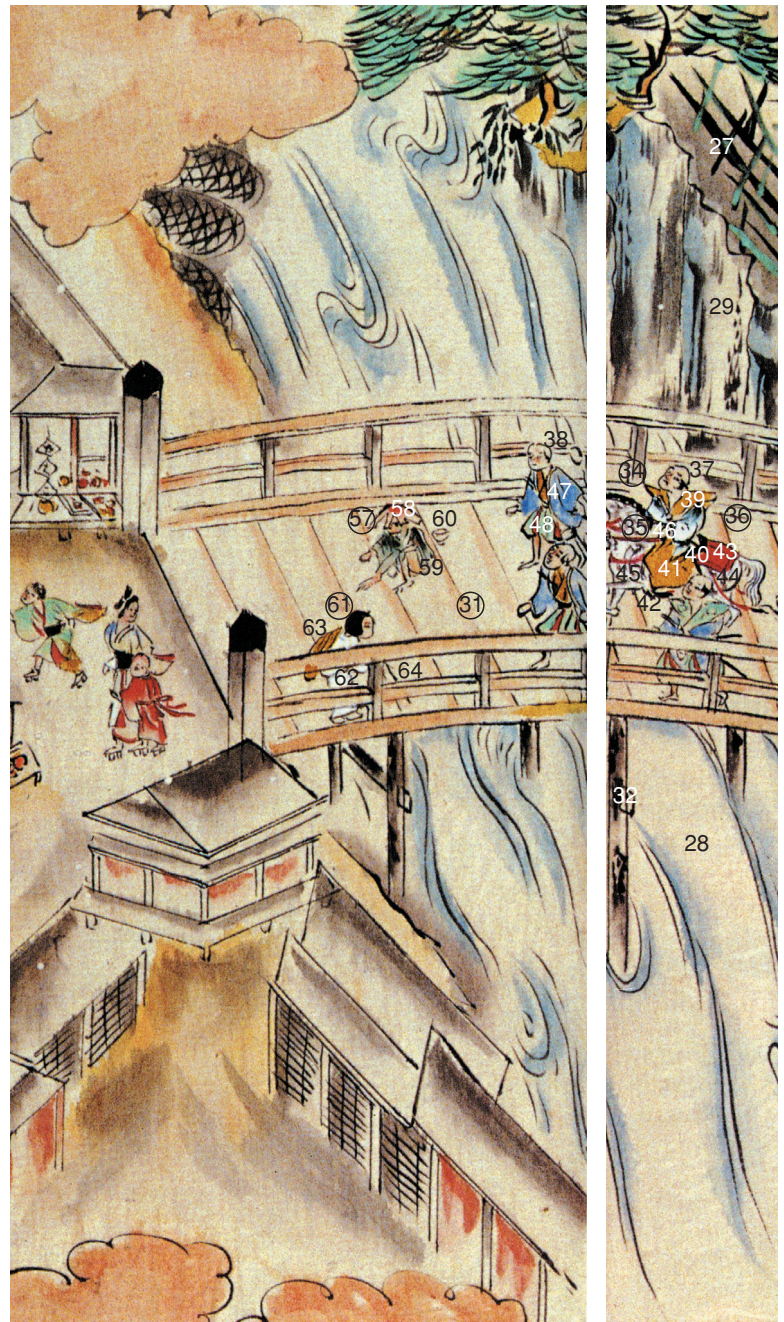
ところで、金沢には藩の崇敬が厚く、厚遇を受けてきた鍛冶八幡宮、春日社など5社があったが、伊

勢神宮の神霊（天照大神、あるいは伊勢内外官の神）を奉祀する神明宮はその1社である。飛神明の信仰によって、室町時代から江戸時代にかけて各地に造られた。皇大神社、天祖神社などともいわれ、「お伊勢さん」と呼ばれることもある。ここ野町広小路の神明社の祭礼日には炙り餅の屋台が軒を連ねたといわれる。また、神社の白壁土塀は大連寺境まで連なり、境内は広大であったという（『日本民俗誌集成』第12巻 三一書房 1997年 p170）。その神明社では現在、正月15日に飾藁その他を焼き払う左義長も行われている。

神明社の前を僧侶の一行が町外に向って歩いている。立帽子を被り、高下駄に黄色の袈裟（三会＝法衣＝福田衣＝僧伽梨）を着ている僧は高僧のようである。日本では袈裟を偏袒右肩ではなく、衣の上に着している。供には頭陀袋をつけ、淡黒い法衣を纏った弟子の僧と傘を持った尻端折りの中間が付き従っている。檀家への挨拶廻りであろうか。その後ろには、僧侶たちと行き違いに、葉つき大根の入った肥担桶を大杓（天秤棒）で担いだ、総蓑姿の百姓が城下町に向っている。

4 犀川大橋を渡る武士団

- | | |
|---------------|-------------------------|
| ① 城下町の町門木戸 | ③④ 武士団の行列 |
| 2 蝶番 | ③⑤ 白馬 |
| 3 乳金物 | ③⑥ 馬上の武士 |
| 4 切妻造りの剥板葺き屋根 | 37 月代 |
| 5 飾り窓 | 38 丁髷 |
| 6 庇 | 39 肩衣 |
| 7 縁板（床縁、台） | 40 大小の脇差 |
| ⑧ 壺屋 | 41 袴 |
| 9 壺 | 42 草履 |
| ⑩ 旅人 | 43 鞍 |
| 11 菅笠 | 44 下鞍 |
| 12 背負い包み物 | 45 鎧 |
| 13 脇差 | 46 手綱 |
| 14 青色着物 | 47 羽織 |
| 15 黒脚絆（はばき） | 48 熨斗目の効いた裁着袴
（カルサン） |
| ⑬ 魚屋 | ④⑨ 槍持ち |
| 17 桶 | 50 槍 |
| 18 魚籠 | 51 着物 |
| 19 魚 | ⑤② 挟み箱持ち |
| 20 盥桶 | 53 挟み箱 |
| ⑳ 葉付き大根売り店 | ⑤④ 草履取り |
| 22 長暖簾 | 55 太刀 |
| 23 頭（兜）巾金物 | 56 合羽籠 |
| 24 親柱 | ⑤⑦ 乞食 |
| 25 煙草屋の印看板 | 58 破れ笠 |
| ②⑥ 煙草屋 | 59 襦袢 |
| 27 竹矢来 | 60 茶碗 |
| 28 犀川 | ⑥① 下げ髪の盲目の女性 |
| 29 河岸の護岸石 | 62 白装束 |
| 30 蛇籠 | 63 背負い菅笠 |
| ③① 犀川大橋 | 64 木杖 |
| 32 橋梁 | |
| 33 欄干 | |



犀川大橋境界である。犀川には天保14年（1843）までは大橋以外の橋はなかった。大橋際の渡り口が城下町入り口であり、したがって犀川は城下町の外堀の役割を担っていた。実際、一部であるが、川岸には竹矢来が仕掛けられている。

川の下流には水流を制御し、川岸の侵食や護岸壁石を守るために石の入った水制工具、蛇籠が所々に装置されていた。蛇籠は中国から4～7世紀頃に伝来したが、大蛇が伏した姿に似ていることから名付けられた。

また、橋の渡り口には町門の木戸が建てられ、城下町はこの町門木戸で仕切られていた。夜になると、治安維持のために木戸は閉められたが、その戸壁には乳金物が施され、町門木戸は蝶番で固定され、簡単に破られないように頑丈に造られていた。町門木戸には潜り戸があり、緊急時などに対応した。

町門木戸に沿って飾り窓のある2階建ての商店が並んでいる。城下入口では商店が町門の側壁の役割をも担わされていたことがわかる。その商店には縁板（床縁、台）が備わっている。図絵右上の店は壺



屋であろう。右下の店は桶、魚の入った魚籠と鹽桶、縁板台には魚が並べられている。魚屋である。そうした造りからなる町門木戸を通り過ぎて、旅人が橋を渡ろうとしている。菅笠に黒脚絆（はばき）の尻端折り姿である。帯刀もしている。武士以外にも成年男子は帯刀をしていた。

旅人の前方の橋は犀川大橋である。大橋は木の橋梁に架けられた欄干付きの板橋である。欄干の四隅には頭（兜）巾金物が被せられた太い橋柱、親柱が立っている。その橋際にある店は独特の暖簾が掲げ

られている。暖簾名を当時、何と表現していたのか、知りえなかったが、煙草屋である。川を渡りきった橋際、親柱の傍にも煙草屋がある。城下出口にある浅野川の渡り口にも煙草屋がある。煙草屋は城下町の出入り口に架かる橋の番太郎（番人）を勤めていたことがわかる。番太郎の費用は町人たちの町政運営費から負担された。しかし、煙草屋は道を挟んだ両側にはない。犀川では片側の店は葉付き大根の販売店である。横には長暖簾を架けた入り口がある。

橋を、正月の挨拶のために登城途中の武士団が渡っている。肩衣を着た白馬上の武士に付き従う9人ほどの供の行列である。馬の前方と側面を、脇差を差した羽織と熨斗目の利いた裁着袴の徒たちと馬の後に付き従う4人の供の中間が付き従っている。中間も脇差をしている。前の3人は槍持ち、挟箱持ち、草履取である。ほかに桐油や柿渋を塗った紙製の合羽籠持ち1人がいる。馬上の武士はこの供回りの規模から600石以上の武士と見られる。

正月は橋上を往来する人びとからの施しが普段より良かったのであろうか、破れ笠に襷褌を纏った乞食が行列を前にして、物貰い用の茶碗を橋上に置いて慌てて立ち上がろうとしている。臨場感に溢れている。その一方で、はす向かいを白装束姿の女性が橋の欄干沿いに武士団の行列に向かって歩いている。女性は下げ髪で木杖をつき、菅笠を背中に背負っている。盲目の女性のようなのである。

5 犀川大橋際の商店街と道行く越前万歳師や町人家族



図絵の理解のために、橋上の武士団の一部、破れ笠を被り、物乞いをする乞食、下げ髪の白装束姿の盲目の女性など『絵引』の図絵(4)(前頁)と重複させて切り取ってある。図絵(4)に続く犀川大橋を渡りきったところの情景である。ここは道が三叉路にわかれた商店街である。

橋際の店は前にも述べたように、橋の管理を担っている煙草屋である。魚屋も軒を並べている。それらは切妻造りの剥板葺き屋根の平屋で、2~3間幅

の店が多く、縁板(床縁)に魚を並べ、あるいは曲げ物(丸桶)に魚を入れて売っている(板売り)。床店(出し店)であったか。また、魚は形からして平目のように見える。

その町中に子ども連れの女性と、越前万歳の太夫と供の才蔵が入ろうとしている。越前万歳師の太夫は頭に素襖烏帽子を被り、麻の青色素襖を着、白色の裁着袴を履き、足は脚絆(はばき)でしっかりと服装をかためている。供の才蔵は白手拭を頭にあて、

- | | |
|-------------|----------------|
| ① 武士団の行列 | ⑳ 親子連れ |
| ② 乞食 | ㉑ 母親 |
| 3 破れ笠 | 23 島田髷 |
| 4 襦袢 | 24 淡青色の小袖 |
| 5 茶碗 | 25 黒帯 |
| ⑥ 下げ髪の盲目の女性 | 26 下駄 |
| 7 白装束 | 27 付紐付きの赤着物 |
| 8 背負い菅笠 | 28 児髷 |
| 9 杖 | 29 振袖着物 |
| 10 親柱 | ㉒ 越前万歳の太夫 |
| 11 頭（兜）巾金物 | 31 素襖烏帽子 |
| 12 煙草屋の印看板 | 32 麻の青色素襖 |
| ⑬ 煙草屋 | 33 白色の裁着袴 |
| ⑭ 魚屋 | 34 脚絆（はばき） |
| 15 板壁 | ㉓ 越前万歳の太夫の供の才蔵 |
| 16 縁板（床縁、台） | 36 白手拭 |
| 17 桶 | 37 網布肩当て付きの蓑 |
| 18 曲げ物 | 38 鼓 |
| 19 魚 | 39 白布袋 |
| ㉔ 出し店（床店） | |

網布肩当て付きの蓑を着、手には鼓をもち、大きな白布袋を背負っている。才蔵は親方の太夫に合いの手を入れて人びとを笑わせたり、鼓を打ったり、囃子を入れたりして調子を合わせた。白布袋には万歳を行うためのいろいろな囃子道具がはいっているのだろう。

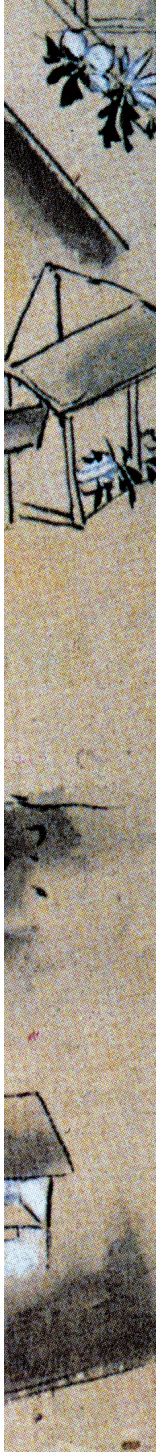
漫才師に興味津々の子どもたちとは異なり、眉毛を剃った島田髷姿の母親は武士団の行列と盲目の女性に気を取られて、振り向いている。武士団の行列

と遭遇する盲目の女性を心配そうに見ている様子である。気遣いが感じられる。その一方で、2人の子どもたちは前に行く越前万歳師に興味津々といったところか、母親の手を引き急がせ、1人の女子は待ちきれず、万歳師に駆け寄ろうとしている。

越前万歳師の太夫と才蔵はこれから町中でひと稼ぎをするのであろう。

6 金沢の片町を行く駄馬と肥汲みの百姓





- 1 切妻造りの石置き
剥板葺き屋根
- ② 厨子2階家店
- 3 虫籠窓
- 4 飾り窓
- 5 庇
- 6 酒屋の看板、酒林（杉玉）
- ⑦ 酒屋
- 8 白壁の土蔵
- 9 松ノ木
- 10 風にたなびく萱簾
- ⑪ 駄馬を引く人夫
- 12 白菅笠
- 13 着物
- 14 鞭
- ⑮ 駄馬
- 16 面懸
- 17 鼻括り輪
- 18 引き綱
- 19 胸懸
- 20 炭俵
- 21 下鞍
- 22 白菅笠
- 23 胴蓑
- 24 大枘（天秤棒）
- 25 肥担桶
- 26 葉付き大根
- 27 町門木戸の親柱
- ⑳ 町門木戸
- 29 蝶番
- 30 乳金物
- 31 横棧

片町である。城に近く、警備上の必要からここにも町門の木戸がある。頑丈な門柱、親柱に蝶番や乳金物が施された木戸である。中2階屋よりも高い。木戸は定刻になると、閉められた。

商家の中2階屋はみな、切妻造りの石置き剥板葺き屋根で、中2階には虫籠窓や飾り窓がある。商家はだいたい4～5間幅の商店で、裏庭には白壁の土蔵が建てられ、松や柳の木も植えられていた。木戸門に近い商店に「酒林」が軒から吊るされている店がある。「酒林」は酒屋の看板である。酒屋以外のほかの店の業態は現在、手がかりがなく知りえないが、店構えなどからしてかなりの資産家の商店であったことがわかる。

店の前を、白菅笠を被り、右手に鞭を握り締めた人夫が駄馬を引いて町外へ歩いている。駄馬の背中に括りつけられた荷物は炭俵であろうか（清水氏解説 p195）。3駄背負っている。通りがかりの商店の店前の萱が風で靡いている様子である。炭俵の重さもあるのかもしれないが、心なしか馬が風上に向かって少し喘えぎなら荷運びしているようにも見受けられる。人夫の背格好から、ゆるい登り坂かもしれない。

空の肥担桶と葉付き大根を入れた肥担桶を担いで町門木戸の方へ歩いていく、胴蓑姿の百姓は下肥を貰いに行く途中であろう。というのも、『耕稼春秋』に「金沢より四方へ一里余ハ小便馬屋糞大に、又3里余までハ真糞、油かす、鱒こ糸を用る。又道程四里程ハ真糞、灰こ糸、干鰯、生鰯、又山方山際ハ此外に草こ糸を用る」（p204）とあり、百姓はあらゆる手段を使って施肥を確保したからである。なお、白菅笠に胴蓑姿の百姓の足元は裸足のように見えるが、当時は裸足が普通であったのであろうか。草鞋を履いていたと思われるが、なかなか確認の難しい事項である。

7 南町から武蔵辻街道沿いの正月風景

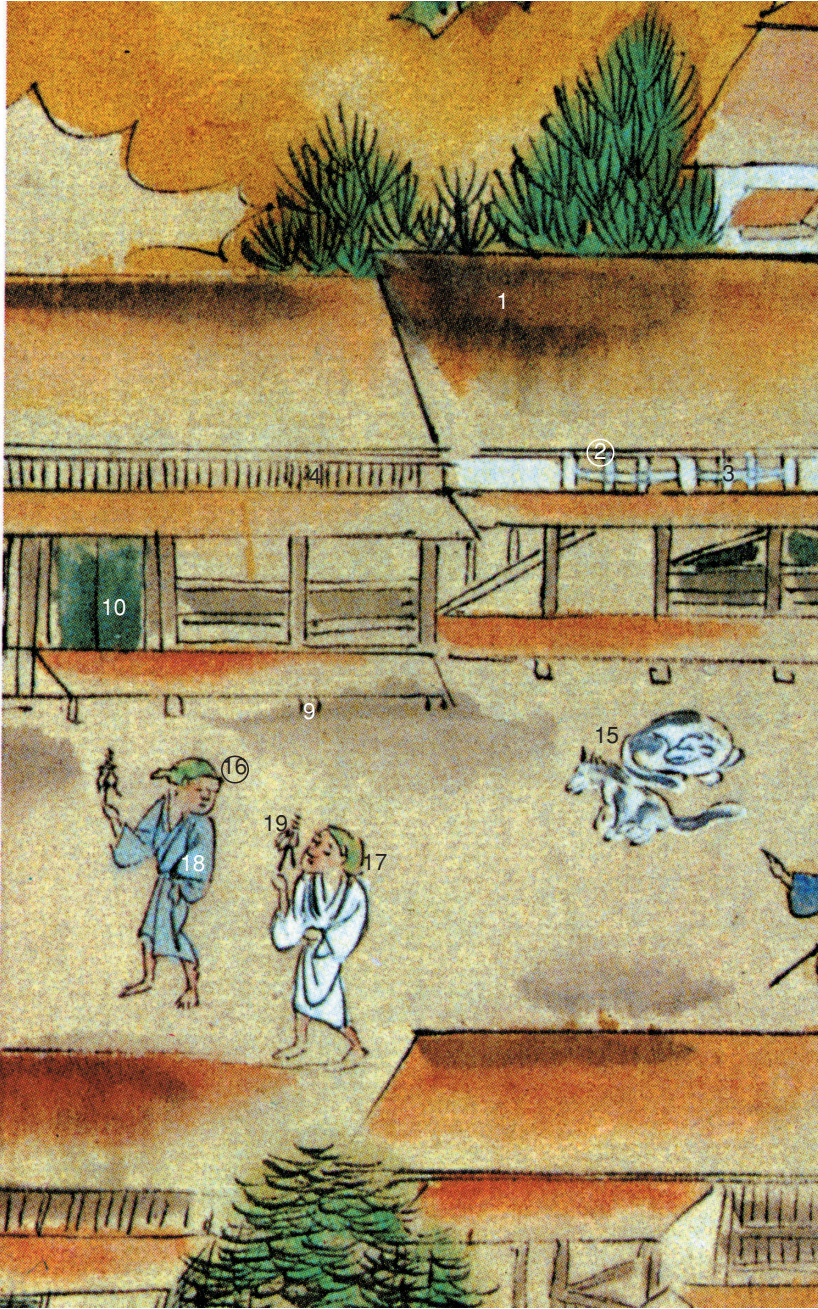


南町から武蔵辻街は藩初以来、門閥商人の老舗店が立ち並ぶ界隈である。切妻造りの屋根には置石がない中2階建ての店で、いずれも見ることからにがっしりした店である。蝶番のがっしりした戸を持つ商店は両替店であろうか。正月で、いずれの店もまだ開店していない。

そうした店々の前の道を、門付けであろうか、頭巾を被り、右手に金剛鈴をもち、話しながら武蔵辻

の方へ歩いている。

彼らの前方には、商店の家族と思われる華やかな着物を着た女性たちが羽根突きに興じている。島田髷の女性は着物の立派さから、2人の乙女の母親とみられる。ソギ袖の青色の着物を着ているが、裏地は赤色で、正月の華やかさを醸し出している。だが、この女性は眉毛を剃っておらず、母親でないのかも知れない。しかし、既婚者の眉剃りは一般的でなか



- 1 切妻造りの剥板葺き屋根
- ② 中2階建て屋
- 3 格子窓
- 4 格子
- 5 丸窓
- 6 庇
- 7 柱
- 8 縁板（床縁、台）
- 9 束
- 10 屋号のない長暖簾
- 11 簾戸
- 12 乳金物
- 13 蝶番が施された戸
- 14 地長押
- 15 2匹の白犬
- ⑬ 門付け
- 17 頭巾
- 18 着物
- 19 金剛鈴
- ⑳ 羽子突きに興ずる
商家の婦人と子どもたち
- 21 島田髷
- 22 ソギ袖の着物
- 23 太鼓結びの帯
- 24 下駄
- 25 眉毛
- 26 羽子板
- 27 下げ髪
- 28 紅裏地の晴れ着の小袖
- 29 蝶結び帯
- 30 京風羽根子（あげ羽）
- 31 銀杏髷
- 32 小袖の晴れ着
- 33 下げ帯

ったともいえる。ここでは着物の艶やかさからも母親と見るのが自然であろう。少女たちも艶やかな着物を着ている。左の少女は銀杏髷を結び、下げ帯をしている。下げ髪の真ん中の少女はまだあどけなさが残っている。それにしても、描かれた少女たちの顔の表情からはいかにも楽しそうな様子が伝わってくる。

ちなみに羽子板の羽は普通、2枚であるが、京風

は3枚である。金沢城下は京の影響がかなりあったと考えられる。文化としては関西系か。

商店の前には白犬が2匹寝そべっている。犬は將軍綱吉の時代、生類憐みの令（1680～1709年）によって保護されていたが、法令の撤廃後も金沢城下では大事にされていた様子が窺える。

8 金沢城を下城して浅野川大橋へ向う武士の行列



- | | |
|---------------|------------------|
| 1 松ノ木 | 24 馬上の武士 |
| 2 木賊(草) | 25 肩衣 |
| 3 切妻造りの剥板葺き屋根 | 26 大小の脇差 |
| ④ 中2階建て家 | 27 袴 |
| 5 虫籠窓 | 28 草履 |
| 6 庇 | 29 馬 |
| ⑦ 米屋 | 30 面懸 |
| 8 米俵 | 31 鼻括り革 |
| 9 縁長押 | 32 轡と手綱 |
| 10 板戸 | 33 胸懸 |
| 11 飾り窓 | 34 鞍と下鞍 |
| ⑫ 茶屋 | ⑬ ナンパ歩きの武士 |
| 13 茶壺 | 36 羽織 |
| 14 縁板(床縁、台) | 37 裁着袴
(カルサン) |
| ⑮ 武具屋 | 38 草履取り |
| 16 鉄砲 | 39 袴姿の武士 |
| 17 太刀 | 40 轟持ち |
| 18 鎧 | 41 立傘持ち |
| 19 甲冑箱 | 42 合羽籠持ち |
| 20 火薬入れ | 43 挟み箱持ち |
| 21 武具備品 | 44 尻端折り姿 |
| ⑳ 箱屋 | |
| 23 箱 | |

藩主や家老などの重役に新年の挨拶を済ませ、金沢城を下城し、浅野川に近づきつつある武士団の行列である。この時の殿様は名君といわれた第5代藩主前田綱紀である。『加賀松雲公』として伝記も残っている、綱紀の時代は加賀藩の黄金期ともいわれている。綱紀は父、光高が正保2年(1645)4月、茶会の席で31歳の若さで急死したため、祖父の第3代藩主・利常(この時、53歳)の後見のもと、3歳で藩主となった。この利常の夫人が將軍家光の姉、珠姫であることもあって、行列では徳川三家に次ぐ位置を与えられた。綱紀が15歳の万治元年(1658)に利常が逝去すると、將軍の命によって岳父の保科正之が後見役となった(妻は保科の息女、摩須)。

綱紀が藩主となってからは数々の善政を行った。祖父の事業を引き継いで新田開発や十村制度の整備、藩独自の農政仕法である改作法を勧め、また自らも凶書の収集(加賀は天下の書府といわれた)や儒者の招聘と学問の奨励と発展、能楽の挙行と後援、象嵌・甲冑

など各種工芸の普及、救貧事業などに尽くした。元禄2年(1689)には正式に徳川三家に次ぐ格式が与えられた。

行列の馬上の侍は享保2年当時、年齢が75歳と高齢であった藩主前田綱紀に目通りしてきた帰りである。尾張町から橋場町の界隈であろう。城に近いせいか、その道筋はいろいろな店が軒を連ねていた。とくに米屋、茶屋、武具屋、箱屋が並んでいる。虫籠窓のある中2階の店である。店前には縁長押でしっかりと固定された縁板(床店)に品物が並べて売られていた。武具屋があるのは城に近いことによる。

こうした店の前を、新年の挨拶を済ませた馬上の武士の一行が自分の屋敷に急ぎ帰っている様子である。馬上の武士は脇差を差し、袴姿の正装である。馬も赤い鼻括り革などを付け、正月の祝賀を醸し出している。

馬の横には馬上の武士の警護を勤める袴姿の侍6名が馬の両脇を固めている。先払いの武士は羽織・裁着袴姿である。そのすぐ後には草履取りが従っている。馬の後ろには轟持ちや立傘持ち、合羽籠持ち、挟み箱持ちの中間たちがおしゃべりしながら付き従っている。行列は整然としたものではなく、かなり気ままな行列である。城から離れた気安さのせいもあるのかもしれない。あるいは、当時、行列はそれほど厳しく統制されていなかったのかもしれない。中間たちも脇差をさしているが、いずれも尻端折り姿である。

馬上の武士が急がせているのであろう、供の侍たちは皆、右腕、右足を同時に出して歩く「ナンパ歩き」である。この歩行法は日本人の伝統的歩行スタイルといわれてきたが、ヨーロッパの歩行法が導入されてから衰退した。しかし、近年は日本人の体型にあった歩行法、日本の伝統的古武術に欠かせない歩行として注目されている。

9 城下町郊外に行く人びと



- | | |
|------------------------|------------|
| 1 卯辰山 | 18 白壁 |
| ② 卯辰山方面の
道を行く百姓 | 19 窓 |
| 3 菅笠姿 | 20 頬被り手拭 |
| 4 平袖の木綿
腰切り上半衣(サルコ) | 21 袴 |
| 5 備中鍬 | 22 着物 |
| 6 一里塚の榎 | 23 帯刀 |
| 7 烏 | 24 袴 |
| 8 盛り土 | 25 扇子 |
| ⑨ 桶・籠屋 | 26 下駄 |
| 10 入母屋造りの
草葺き屋根 | ⑳ 振袖の女性 |
| 11 屋根押さえ | 28 島田髷 |
| 12 白妻壁 | 29 柿色帯 |
| 13 庇 | 30 青前掛け |
| 14 柱 | 31 チロリ(銚釐) |
| 15 縁板(床縁、台) | ㉑ 小姓 |
| 16 束 | 33 立髪 |
| 17 切妻造りの
剥板葺き屋根 | 34 袴 |
| | 35 袴 |
| | 36 帯刀 |
| | 37 屋根の置き石 |

金沢城下の郊外、金腐川方面へ行く途中にある一里塚のあるあたり、山ノ上町である。一里塚は道の両側に造られ、かなりの盛土をして榎を植えてあり、街道を行き来する人びとの道程の目安となった。おそらく、戦闘部隊の出入りなどを見極める軍事上の標識としても使われたのであろう。

この榎には烏が止まっているが、その遠方に道がある。卯辰山への登り坂道である。そこを、備中鍬を担いだ百姓が登っていくのが望見される。山のほうにも畑があるのであろうか。

ところで、さすがに山ノ上町界限までくると、街道沿いの商店などの様相も変わってくる。立派な店構えの店があるものの、桶・籠屋の屋根を見ると、入母屋造りの草葺き屋根である。道を挟んだ手前の家の屋根も草葺き屋根で、隣家の屋根には置石もみられる。

そうした商店が並ぶ道を、手に扇子を持ち、頬被りをした袴姿の武士体の人物が歩いている。清

水氏は彼をかなり酩酊した武士と捉えている(清水隆久「図絵解説と解題」)。そうであれば、青前掛けを付け、チロリ(銚釐)をもって酒を買いに行ってきた女性が振り返ってみている、袴姿の若侍は酩酊した手拭の頬被り姿の武士につき従う供の小姓ということになるか。小姓も酒が入っているように見受けられる。しかし、いくら酩酊していても武士が頬被りなどをして歩くのであろうか。確かに酩酊しているが、袴袴姿の2人はもしかしたら、侍姿をした門付けであったかも知れない。正月はこうした出で立ちも許容されていたか。

なお、青前掛けをしている島田髷の女性が持っている容器がチロリであるとしたのは、この図絵に続く前の図絵に酒林の杉玉を軒先に吊した酒屋が描かれてあり、この酒屋から酒を買って帰る途中と考えられるからである。そのようにみた方が自然であろうと考えたことによる。

10 田に踏土（土肥）や下肥を運ぶ



- ① 百姓家
- 2 入母屋型
草葺き屋根
- 3 屋根押さえ
- 4 柱
- 5 通し貫
- 6 葭
- 7 土壁
- ⑧ 農耕白馬を引く
百姓の童
- 9 鞭
- 10 丁髷
- 11 平袖の木綿腰切り
上半衣(サルコ、
あるいは甚平ともいう)
- 12 脚絆(はばき)
- 13 裸足
- ⑭ 農耕白馬
- 15 蠶たてがみ
- 16 面懸
- 17 鼻革
- 18 轡くつわ
- 19 曳き綱
- 20 胸懸
- 21 胸懸尽
- 22 尻懸
- 23 下鞍
- 24 四つ負い馬肥担桶
- 25 馬蹄
- 26 岩
- 27 川
- 28 頬被り手拭
- 29 上半衣
- 30 腰蓑
- 31 大杓(天秤棒)
- 32 踏土(土肥)
- 33 柳

春の荒起し前の田圃に、これから下肥(糞尿)や踏土(土肥)を百姓家から運ぶところである。その百姓家は、18世紀はじめの金沢近郊農村ではほとんどが草葺屋根と菰や葭・板壁から造られ、床はなく、土間であった。そこで百姓は生活をしていた。

その生活空間で排泄される、ないしは作られる下肥、それと踏土は農業にとって欠かせない大切な肥料であった。踏土とは前年から草や落葉、あくた、糠、藁屑、塵芥などを土に切り混ぜて、人馬に踏ませて作った肥料である。踏土は田に撒いて、元肥として利用した。まだまだ自給肥料に頼っていた18世紀はじめの金沢近郊農村では、刈敷や草木灰、土肥、下肥は地力の維持増進に欠かせない必要、かつ重要な肥料であった。

それらの肥料のうち、四角い塊に切り分けられた土肥は天秤棒(大杓)で、糞尿の下肥は農耕馬の両腹に括りつけた四つ負いの馬肥担桶で田圃に運んだ。図絵をみると、土肥の運搬はもっぱら大人の男の仕事であったようである。かなりの重さがあったのであろう。運ばれた土肥は田圃の中に無造作にちりばめられて置かれた。のちに、それらは小さく切り崩されて散らし、犁き込まれた。

それに引き換え、下肥の運搬はもっぱら若者の仕事であったようである。ほかの図絵をみても、下草や下肥の運搬に若者が従事している場合が多く描かれているので、農村では牛馬の扱いはもっぱら若者の仕事とされていたように思われる。下肥は田圃に運ばれ、小さな桶に汲み移され、柄杓で撒き散らされた。

11 春、馬犁(鋤)耕などに勤しむ百姓と花見を楽しむ家族



- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 1 川 | 27 煙管 |
| 2 桜の木 | 28 仰向けに寝そべる男 |
| ③ 胡坐をかく男 | 29 松明 |
| 4 月代 | ③⑩ 農耕馬 |
| 5 下げ髷 | 31 蠶 |
| 6 平袖の着物 | 32 面懸 |
| 7 グイ飲み | 33 鼻革 |
| 8 底浅の丸小鉢 | 34 手綱 |
| 9 丸小鉢に盛られた惣菜 | 35 鞍 |
| 10 酒樽 | 36 下鞍 |
| ⑪ 頬杖を突く男子 | 37 胸懸 |
| 12 兀僧髪 | 38 索綱 |
| 13 中剃 | ③⑨ 馬犁 <small>（犁鍬がない）</small> |
| 14 茶色の着物 | 40 鋤 <small>（引木）</small> |
| 15 帯 | 41 練木（ねり） |
| 16 頬被りの男 | 42 犁柱（たたり） |
| ⑬ 正座するグル髷の女性 | 43 犁身（いさり木） |
| 18 白襷 | 44 犁床（すり木） |
| 19 白い着物 | 45 犁先 |
| 20 股引 | 46 把手（烏頭） |
| 21 小盆 | 47 平袖の木綿腰切り |
| 22 大桶 | 白上半衣の百姓 |
| 23 かい餅 | 48 鋤 <small>（平鋤）</small> を担ぐ百姓 |
| 24 小桶 | 49 尻端折りの腰きり上半衣 |
| 25 椀 | |
| 26 一服しながら談笑する
爺さんか、婆さん | |

これは『農業図絵』に「堅田一番返し」として描かれた図絵である。「堅田一番返し」とは乾田を荒起ししたのち、土を細かく碎き（小割り、あるいは小切りという）、さらに犁きかえすこと、または1回目の犁返しということである。

図絵はその情景であるが、その農作業の傍で桜の花見をし、のんびり飲食している家族連れがいる。胡坐をかいた男は一家の主であろうか、惣菜を楽しみながらグイ飲みで濁酒を飲んでいる。酒樽の横の頬被りした男も濁酒を飲んでいる。兀僧髪の子もは退屈そうに頬杖をついている。

その傍らでは、この家族の股引姿の主婦が白襷掛けで、用意してきたかい餅や丸小鉢に盛られた惣菜を、傍らでは頬被りの男性が手伝って椀に取り分けている。娯楽であっても、相変わらず農家の主婦は忙しく、休む暇がないことを示している。

そのなかにあって、爺さんとも婆さんとも思われる老人が談笑しながら煙管で煙草を吸っている。もともと、神奈川大学日本常民文化研究所蔵の『耕稼春秋』ではこの人物を明らかに老婆として描いている。女性の喫煙習慣は19世紀になってから、といわれているので爺さんとみておいたほうが妥当だろう。だが、検討の余地が残されている。老人の顔を見ると、赤ら顔である。すでに酔いが回っている感じである。あるいは、この地域では麻の栽培も行われていたので、老人の表情からみて大麻を吸っているとも想像されるが、可能性はあるであろうか。老人の悦に入った表情は何とも形容しがたい。なお、火のついた松明は虫除けのためである。

家族連れの手前の田圃では馬で犁返しに勤しんでいる百姓がいる。農耕馬も頭を下げ、踏ん張って犁を曳いている様子である。とはいえ、馬耕犁は長床犁で、へらが固定されていた。したがって、折り返しての馬耕はできなかったという。金沢近郊農村での特徴であったか。

また、馬犁を操っている百姓の着衣、平袖の木綿腰切り白上半衣を見ると、左衽である。図絵がどれほど正確に描かれているか、検証することは難しいが、『農業図絵』の城下町の武士や町人などには左衽姿が見られない。土屋又三郎が不用意に百姓の姿を描いたとも考えにくい。左衽は野蛮人の表象といわれているが、野良仕事では着物の衿に気を使っている暇はなく、襟合せなどに無頓着であったのであろう。実際、野良仕事では左衽、右衽はどうでもよいことであつたに違いない。

ところで、清水隆久氏も指摘しているように、多忙なこの時期に、犁返しをしている百姓の側で桜の花見をしている人びとがいるのは不思議である。清水氏は町の人間の可能性を示唆するが、服装からみて考えにくい。百姓の、忙中の束の間の楽しみとも見てとれるが、そのほうが理解しやすいか。とはいえ、傍の堅田のなかで（平鋤）を担いでいる尻端折りの腰きり上半衣の2人の百姓は、心なしか呆れて眺めているのが何とも印象的である。

12 山から刈り草を運搬する牛と童



- 1 木
- 2 野草
- 3 赤手拭の頬被り
- 4 平袖の木綿腰切り白上半衣（サルコ）
- 5 草刈り鎌
- ⑥ 牛
- 7 牛角
- 8 刈草
- 9 草押さえ紐
- 10 尻懸
- 11 胸懸
- 12 鼻括り
- 13 曳き綱
- 14 小道
- 15 岩
- ⑩ 男童
- 17 兀僧髪
- 18 腰切り衣
- 19 鞭
- 20 裸足
- ㉑ 駄馬
- 22 白菅笠
- 23 松木

刈草を牛や駄馬の背に積んで下ってくる様子である。18世紀当時、農村ではまだ自給肥料に依存していた。自給肥料とは木の葉や小枝、灰、人糞、牛馬糞尿（厩肥畜）である。踏土、刈草もそのひとつである。その確保は地力の維持増進に関係し、ひいては農作物の良し悪し、生産高の増減などに強く影響した。したがって、その確保と準備は農家にとって経営上、欠かせない大切な作業であった。

百姓が草刈鎌を使い、草刈に精を出しているのは、至極当たり前のことであった。刈草は束にして結わえ、それを牛や駄馬の背に紐で括りつけ、野山から家まで運んだ。こうした作業は9月まで続いた。こうした牛馬による運搬は男童が行っている場合が多い。牛は力強く、かつ大人しいので扱いやすく、男童でも牛を扱えたのである。牛は馬に比較して扱いやすかったようである。

馬での刈草などの運搬には大人があたったようである。大まかな役割分担があったように感じられる。しかし、他の図絵にもあるようにその分業が絶対というわけではない。前にもみたように、馬による肥担桶運搬は男童が行っていたからである。

ところで、『農業図絵』をみると、農耕馬は描かれているが、農耕牛は描かれていない。この地域での特徴か。御供田村では耕作はもっぱら馬耕であったようである。とはいえ、宝永5年（1708）の御供田村には馬は8頭しかいなかったから、馬は貴重な労働力であった（『金沢市史』資料編9 近世7 p609）。金沢藩でも農耕馬の能力を高める工夫に努めたといわれている。とくに、奥州馬等の名産地からの優秀な種馬を導入し、繁殖と改良を行い、それらの売買には馬市を設け、そこを通じて行うように金沢藩では指導したことが知られている（『金沢市史』通史編2 近世 pp705～708）。

13 稲蔵入り後の小祝い



- 1 笹藪
- ② くず屋
- 3 入母屋造りの藪
(あるいは茅) 屋根
- 4 破風
- 5 妻壁板
- 6 藁妻屋根
- 7 側柱
- 8 板下屋
- 9 ニワ (土間)
- 10 隅柱
- 11 田圃着
- 12 三幅前垂け
- 13 月代
- 14 テッコバ
(テッコウモジリ、仕事着)
- 15 煙草盆
- 16 煙管
- 17 煙草入れ
- 18 主人
- 19 大椀
- 20 白手拭
- 21 赤襪
- 22 モジリ
- 23 田圃コシマキ
(スカート状のもの)
- 24 瓶子
- 25 帯
- 26 丸曲物
- 27 かい餅
- 28 重箱
- 29 煮物
- 30 箸
- 31 土台
- 32 新稲穂
- 33 乞食窓 (無双窓)
- 34 稲鳩
- ③⑤ デロレン祭文
- 36 坊主頭
- 37 法螺貝
- 38 白い着物
- 39 法螺貝をもつ供の少女
- 40 乱れ髪の少女
- 41 坊主頭の子ども
- ④⑥ 赤ん坊を背負った母親
- 43 グル鬘
- 44 木地椀
- ④⑤ 菰被りの乞食
- 46 椀
- 47 褌
- ④⑧ 腰蓑姿の子ども
- 49 肩掛け袋
- 50 犬
- 51 屋根押さえ

稲を刈り取った後の稲束のおき方には東立、刈倒、算積などの方法があった。それを乾燥させる場所、稲架場^{はさば}で干し、十分乾燥させた後に、新稲穂を蔵や作納場に運び入れたり、あるいは家の周りに稲束を傘状に積み上げたりした。これを稲鳩^{いなにお}という。

これらの作業が終了すると、百姓たちは慣習としてささやかな小祝いをした。藁や茅で葺かれた屋根の家(くず屋という)では、ニワ(土間)の上に菰や藎を敷き、その上に皆が座り、主人と思しき男を囲み、丸曲物や重箱に煮物やかい餅を用意し、それらを肴に濁酒を飲み、煙草をふかしてひと時のくつろぎを味わった。しかし、その時でもお酌をして廻る農家の主婦たちの労働は軽減されることはなかった。

しかし、こうした小祝いの時期を門付けや乞食たちは、年中行事としてよく知っていたのであろう、収穫を祝うために村里にやってきた。娯楽の機会が少ない農家の主婦や子どもたちにとっても、それは楽しい出来事であった。デロレン祭文も遣ってきた。そのデロレン祭文とは門付けの説教歌祭文(俗謡化した祝詞語りの一種)のことで、法螺貝を吹き、短い錫杖を鳴らしながら語り、その合い間、合い間に「デロレン」と合いの手を入れ、施しを受けた門付けである。ただ、この図絵には錫杖は描かれていないが、坊主頭のデロレン祭文が法螺貝を吹きながら、同じく法螺貝を吹きつつ歩く少女を連れ従えている。もうひとりの少女も連れで、デロレン祭文の子どもであろう。親子での門付けである。

また乞食もやってきた。図絵に描かれているのは褌ひとつの、裸同然の乞食である。わずかに薦被りをしている。米の収穫祝いのご相伴に預かろうと来たのであろう。乞食も子ども連れである。その子どもも腰蓑ひとつである。子ども連れのほうが人びとの哀れみを誘い、より多くの施しを受けやすく乞食は助かったに違いない。犬も法螺貝などの演奏や人びとの楽しさにつられて興奮し、遠吠えをし、楽しんでる様子が窺える。

なお、脱穀後の稲藁は燃料や俵・縄・菰・藎・草鞋などの藁製品やスベ^{ちようずかみ}(手水紙)の材料に利用された。

14 犀川下流域の漁撈

- | | |
|----------------------------|----------------------------------|
| 1 犀川 | 40 大椀小椀 |
| ② 川漁師 | 41 壺 |
| 3 布肩当て蓑 | 42 大桶 |
| 4 刺子 | 43 縁板(床縁、台) |
| 5 股引 | 44 縁束 |
| 6 青色脚絆
(はばき) | ④⑤ 瓢箪屋 |
| 7 脇差 | 46 瓢 |
| 8 手拭い被り | ④⑦ 中2階建て屋 |
| 9 投網(撒網) | 48 虫籠窓 |
| 10 錘 | 49 白壁 |
| 11 腰蓑 | 50 庇 |
| 12 蛇籠 | 51 水引き暖簾 |
| 13 水柵 | 52 座布団屋 |
| 14 護岸石 | 53 白菅笠 |
| 15 二枚板漁舟 | 54 平袖の木綿
腰切り半衣(サルコ) |
| 16 表 | 55 腰蓑 |
| 17 先舟梁 | 56 赤土蕪 |
| 18 梁 | 57 月代 |
| 19 棚(側板) | 58 丁髷 |
| 20 オモキ | 59 テッコバ
(テッコウモジリ、
仕事着) |
| 21 練り糺 | 60 脚絆(はばき) |
| 22 鴨の群れ | 61 筒袖の
テッコバコシマキ
(スカート状のもの) |
| 23 松ノ木 | ⑥② 鎖屋 |
| 24 切妻造りの
へぎいた
剥板葺き屋根 | 63 蓆 |
| 25 土蔵 | ⑥④ 貸本屋 |
| 26 窓 | 65 縁葛 |
| 27 入母屋造り
へぎいた
剥板葺き屋根 | 66 大杓(天秤棒) |
| 28 妻壁 | ⑥⑦ 島田髷の女性 |
| 29 妻屋根 | 68 眉毛 |
| 30 棟木 | 69 振袖 |
| 31 草葺き屋根 | 70 カルタ結びの黒帯 |
| 32 置石剥板
へぎいた
葺き屋根 | 71 高下駄 |
| 33 網代垣 | 72 野籠 |
| 34 簾 | 73 芥子坊主頭の子ども |
| 35 玄関土間 | 74 腰白半切り半衣 |
| 36 隅柱 | 75 ケラ籠 |
| 37 土台 | 76 じゃれ合う2匹の犬 |
| 38 側柱 | |
| ③⑨ 容器屋 | |



網で獲ったようであるが、犀川の図絵の下側には赤土蕪の名産地として誉れ高い赤土村から運んできて、町場で忙しく売り歩いたり立ち売ったり、あるいは道端で掛け声をあげて売る赤蕪売りの人々が描かれている。このことから、季節は11月中頃過ぎ以降、と思われる。そうすると、漁獲物はウグイではなく、やはり鰍とみて間違いなからう。その鰍は正徳2年(1712)の寺島良安著『和漢三才図会』(平凡社 東洋文庫471 p187)によると、黄頰魚の仲間であり、小さい鯰に似た無鱗魚で群游してキシキシという声を出す、この魚は浅野川や奥州の鳥海山麓の川に多くいて、ゴリゴリと声を出すとも



いわれている。加賀や越州の人はこの鰯を鮓にして多く食べたと伝えられている。浅野川にも多くいたことがわかっている。漁獲鰯は鮓だけでなく、佃煮にして食べることもあったが、これは近代以降のことと推測される。

また犀川にも蛇籠が見られるが、蛇籠や沈床のある堤防辺りの護岸石のあるあたりが鰻の生息地でもあり、鰻も漁獲されたと考えられる。だが、当時、漁獲されていたかどうかは今のところ確証はない。

ところで、鰯を獲る漁獲網、投網は藁製であったと思われる。というのも、網の材質が藁から麻に変わるのは漁業の先進地、瀬戸内海でも18世紀の中

ごろ以降のことといわれているからである。この鰯漁は近代になると、2人が組んで1人が三角の竹籠（ブツタイ）をもち、もう1人が板で追い込むという漁法で行われたり、掴み取りしたりして行われた。18世紀には投網が一般的であったのであろうか。

図絵に描かれた犀川河口域の右岸は町場である。清水氏は町中と水の組み合わせが腑に落ちないと指摘されているが、図絵の情景は必ずしも整合的でないのかもしれない。とはいえ、この図絵をみると、町場では土蔵をもった切妻造りの^{へぎいた}剥板葺き屋根の商店が建ち並び、その一方で、草葺き屋根や置石の^{へぎいた}剥板葺き屋根の商店が商売をしていた。しかし、道の向かい側は草葺き屋根の粗末な商店があるといった町場の郊外、すなわち在町に近い様相を呈している。しかし、商店を見ると、壺や桶などを商う容器店や座布団などを商う店、鎖屋や貸本屋などかなりの店構えをした商店が軒を連ねている。しかし、商売からみれば、赤土村からの蕪売りたちに商売のお株を完全に奪われている様子が生々しくわかる。開店している商店で働く人びとがひとりも描かれていないのは象徴的である。

そうしたなかで、島田髷を結び、元禄袖の着物をカルタ結びの黒帯で結わえた、眉毛のある女性が蕪を買おうと、蕪売りのほうへ行っている。この女性は眉を剃っていないが、身なりから推測して、近くの商店の内儀であろうか。蕪売りも商売が成立しつつあることに笑みを浮かべているようにもみえる。女性の後ろから声を掛けて近づこうとしている芥子坊主頭の子どもは、脇に白編み笠をつけ、足元には野籠が置かれていることからみて、蕪売りの子どもと考えたほうが自然のように思われる。

蕪売りで賑わう道で白犬と灰色の二匹の犬がじゃれあっているが、そこを空のケラ籠を背負った白菅笠の平袖の木綿腰切り半衣姿の男が一仕事を終えて村へ帰るところである。何を売って来たのであろうか、この図絵からは窺い知れないが、平穏な顔立ちをしているところをみると、商売はうまくいったのであろう。

15 年末の農家の洗濯風景



- | | |
|--------------------------------|--------------|
| 1 白山 | 15 頭巾風被り |
| 2 柳の木 | 16 前垂 |
| 3 天然腕木（又木） | 17 下駄 |
| 4 天干ししている田圃着 | 18 汚れた洗濯物 |
| ⑤ 尻端折り姿の百姓 | ①9 蓬髪の少女 |
| 6 手拭い被り | 20 振袖の着物 |
| 7 鍬（平鍬）
<small>ふんすき</small> | 21 裸足 |
| 8 テッコバ
（テッコウモジリ、仕事着） | 22 手取川 |
| 9 帯 | ②3 洗濯する農婦 |
| 10 禪 | 24 結び髪 |
| 11 草鞋 | 25 田圃着 |
| 12 踏み鍬 | 26 手洗い中の洗濯物 |
| ⑬ 赤子を肌負いする母親 | 27 洗い上がりの洗濯物 |
| 14 赤子 | ⑲ 盥桶 |
| | 29 鉄箍ね |

図絵の後景の山は日本三名山の一つ、白山である。この山は加賀・越前・美濃にまたがる信仰の対象となってきた山である。古くから霊峰として加賀の人びとにも崇め奉られてきた。ここでは戦国期から禪頂社造営の柚取権をめぐって周辺の村々で断続的に争論が続いてきた。17世紀中頃、その争論が加賀藩と福井藩の村々との間で再燃し、会津藩23万石の藩主保科正之（徳川秀忠の4男）の仲裁により、寛文6年（1666）白山麓18カ村を天領とすることで解決が図られた。

白山を源流とする手取川の川岸で、新年を迎えるための準備として、百姓たちは年末に溜まっていた汚れ物の衣類などを洗濯した。洗濯には当時、米糠や米のとぎ汁、灰汁などが用いられていたため、おそらくそれらを洗剤として利用していたに違いない。

ところで、図絵には木台や石台が描かれていないので、御供田村では砧打ちによる洗濯は行われておらず、もっぱら手洗いだったかと思われる。

しかし、12月の川水はかなり冷たく、川の中に入り、足が水につかりながら手洗いする農婦にとっては、手足が赤切れするほどのかなりきつい労働であった。洗濯の時には普通、足が濡れないように下

駄を履き、川中に入る時には下駄を川辺に脱いで行うが、洗濯をする農婦の川辺には脱いだ下駄も見受けられないことから最初から裸足であったか、あるいは背中後ろに置かれ、見えないのかもしれない。しかし、洗濯物を運んで来る農婦は下駄を履いているので、洗濯をしている女性も下駄を履いていたと考えたほうが妥当であろう。それにしても、川中に足を浸かりながらの洗濯は辛い仕事であったに違いない。

その農婦のところに、赤子を背負った農婦が別の洗濯物を持ってやって来る場所である。蓬髪の小さな女の子が農婦に慌てて付いてきているようである。洗濯している農婦の顔立ちは洗濯物を運んできた農婦より若々しく、この若い農婦はこの農家の若嫁と考えられ、そうであると洗濯物を運んできた農婦は若い農婦の姑であろうか。

その若い農婦の後ろでふんすき鍬（平鍬）担ぎ 踏み鍬を持った農夫が姑らしき農婦に何やら話しかけているが、農婦が姑ならば彼は舅であろう。舅も年の終わり、新年を迎えるための準備に、鍬（平鍬）や踏み鍬を川に洗いに来たか、あるいは洗濯場の足場直しを兼ねて来たのであろう。